

二〇二一年夏以降

高齢者濃厚治療非効率　アメリカ帰りの若き医者いう

前立腺　ガンの速度と寿命の長さ　どちらが先かと医者がのたまう

ゴミ置場ひと月会わざる人ありて　消息聞けば死の床にあり

ひ孫の女兒（こ）　歯が生え初めて伝い歩き　我をば眺め紅葉手を振る

三十年会わざる友が対面に　白髪頬こけ光陰厳し

（以上2021年夏から秋）

戸別ごと菓子売り歩く少女見て ドーナツを買うこの年の暮れ

(2021年12月、手押し車で戸別訪問する少女を見て)

一世紀の時間感覚身近かなり 九十余年生きし功德か

高齢者らのエッセー読みて空しかり 残(のこ)んの命いかに燃やさん

稀有の友と思いし友が旅立ちぬ 心荒涼として夕焼けに立つ

(経済学者・正村公宏、県庁時代、政策面で大変世話になった。信州大学への転職を勧めてくれたのも彼だった)

玄関を最後に出でし日の姿 妻を思いて玄関を掃く

(2018年6月21日、最後の外出となった。4時間自分のベッドに横たわった後病院に帰った。帰り際車椅子から小さな声で「長い間お世話になりました」と頭を下げた。一週間後に他界したが、思い出すたび涙が出る)

90代生きる糧をば探せども 未だ探せず3年（みとせ）が過ぎる

90年生きて来し人の書を読めど これだと言える書（ふみ）はまだなし

うたコンの若き歌手らの歌聞ても これぞ歌だと思えるものなし

結局は生きるも死ぬも無明なり 無明の縁（えにし）に掌を合わせるのみ

90年生きて身に沁む感覚は 実感となる1世紀の長さ

（2022年晩春）